

魚を守る・釣る 共存の魅力



吉祥寺②

今回は魚にまつわる話題だ。

買い物客が行き交う吉祥寺駅から徒歩5分。緑につつまれた都立井の頭公園(武蔵野市三鷹市)に著く、休日ともなる。安らぎを求め市民といっしょに。井の頭池には、白鳥ポイントを、親子連れやカッパルが乗った手ノ喜ポイントが浮かぶ。



を約1カ月、天日干しにした。

水はきれいになったのだから

歓声が聞こえる水辺で、土木作業をする人たちが、池を守るボランティア「井の頭かいはり隊」だ。井の頭池には、水を抜いて泥を除去する「かいはり」を2014年から3回実施している。初回は、自転車など大量の粗大ゴミが見つかったが、本来の目的はブルイダルやトラックバスなど外来魚の駆除だ。また水の汚れの原因ともなる泥中の窒素やリンを減らすために、水を抜いた後は池底

はきれいなになったのだから、池底にかかる七井橋からのぞいた。池底が見える。水草が揺れ、小さな魚が泳いでいる。ボランティアが「水草はツツトモでよしと教えてくれた。一度は消えし結果、復活再生しようという。フナやナマズなどの魚も増えた。かいはりは古くから各地で行われてきた。ただ、全国的に有名な



釣った魚を調理して食べられる釣り堀カフェ 武蔵野市吉祥寺本町の「Catch and Eat」

った。周辺の泥や落ち葉が流れ込まないようにする。水辺に湿地も作った。植物の種類が増えてカイツブリなどの水鳥が巣を作りやすい。ボランティアに参加する市民が増え、勉強会も定期的に開かれしている。メンバーの一人、金子博子さん(55)は「生態系の仕組みがわかるようになって知識が深まった。楽しい」。NPO「生態工房」(武蔵野市)の片岡友美さん(46)は「一時的なイベントではなく、池を守る地道な取り組みが大事だ」と訴える。池の風景も変わりつつある。昔は池の魚を釣って食べたり、泳いだりしていたが、今は禁止。噴水は、水を循環させるためだが、泥を巻き上げていたことが分かって停止。片岡さんは「池の利用法は、時代に合わせて変化する。自然や生き物を大切にして、見守ることが今の公園の楽しみ方だ」と思う」と話した。

井の頭公園で行われたことで広く認知される。テレビ番組「池の水ぜんぶ抜く大作戦」(テレビ東京)はシリーズ化している。珍しい魚などが捕れて驚く様子が面白くて、つい見入ってしまう。

ただ、課題は、かいはりの後だ。ボランティアが地道に池を守っている。先月は池の周りに枯れ木を積み重ねた「しごから柵」を

カフエ屋の店の中に、深さ80センチのいけが三つある。高い椅子に座り、さおを立てる。ニシマスやアナゴがいた時もあるが、今はホンモロコが泳いでいる。家族連れも多く、ほとんどが初心者だ。近所に住む山下菜々美ちゃん(5)は「最初は難しかったけど、釣れるようになって楽しい」と喜んでいました。店長の笹原薫さん(55)は「今夏はお客様を集めて船を出してキス釣りも行なった。ここをきっかけに、釣りを始めてもらえたら」と話した。



①かいはりの成果見学会では、市民に在来魚を水槽展示した=井の頭恩賜(おんし)公園100年実行委員会提供
②水辺の一部を湿地化するボランティア=井の頭公園



魚を守る取り組みと、新しい魚の楽しみ方。それが吉祥寺に共存していた。

石岡妙子